

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第十回

団 士郎

仕事場D・A・N / 立命館大学大学院

22年前の業務中心の日誌を一ヶ月ずつ、今の私が振り返る企画。10回目ともなると飽きてくる。読者は読まなければいいのだから簡単だが、筆者はそういうわけにはいかない。(勝手にやっておいて、何を言っている！)

「意味のないことまで、だらだらと・・・」とか、「要するに何なのか・・・」と思わないでもない。

そしてこれがまさに、ある意味この連載の本旨だとも思う。仕事の日常とはそういうものだからである。

もし仕事が、事件や祭りで代表されてしまったら、日常は「祭りの前か後」ということになる。結果だけが目的だとしたら、陽の目を見なかった日々の地道さは空しい。レギュラーになれないのに繰り返すトレーニングも空しい。勝利に結びつかなかった努力は徒労ということになる。すぐに結果のでない精進が無駄に思えても仕方がない。

だが本当は、そんな投資と対費用効果のような因果が、仕事の意味であるはずがない。そんな働き方ばかりし続けてしまった結果が私たちの周りに蔓延していて、今、不毛さに苦しんでいるのではないのか？

暮らしか、生きることとか、働くことは、誰かに勝つことや、け落とすことではない。

米を作っている人は自分の田んぼも、隣の田んぼも豊作だったら嬉しいだろう。そんな時に凶作地域を想像して、価格高騰に期待を寄せるのは業者だ。そういう人たちは作物を育てない。経済にしか熱中できない。あらゆることを利益をあげる手段にしか考えない拝金主義者にとって、グローバル経済社会がわがもの顔でいられる世界なのだろう。

私はそんな感覚がまったくしっくり来ない。経済問題を軽んじるつもりはないし、お金は大切だと思っている。でもそれは、いくら集めるかではなく、どう経済活動(消費)するかが重要だ。豊かになるとは、使い道のことであって獲得量(金額)や備蓄量の事ではない。

世代間の格差が喧伝される(真偽に疑問もあるが)。その恵まれた側だと言われる団塊世代人としては、今、何に消費するかが問われている気がしてならない。精神貧困なまま、勝ち逃げの年寄りにならないために、考えなければならないことがある。

(2012/9/15)

1990年10月

10/1 MON 別の歯がまたちょっと欠けて歯科へ行った。公演のシナリオ打ち合わせ。本当に手間取っている。こんな大変なことになるとは思わなかった。

少し具合が悪いと、直ぐに歯医者にゆく事にしている。だから一度で治療完了になることが多い。ずるずる治療に通い続けたり、手遅れみたいなことが嫌いなのだ。

しかしこの行動は、健康に気遣っているというより、面倒な事態を早めに避けている感じが強いので、不健康な一面なのかもしれない。

延々と通院したり、待合室でぼんやり時間を食いつぶされていくのが心底嫌いなのである。こういう性癖は、介護や付き添いを面倒がる傾向に現れている。歳を取ったら公私ともに、そういう現実が近づいてくる。効率的に動けることに酔いしれるばかりではない行動パターンの学習が必要なのは分かっているのだが、なかなか身につかない。

児相研セミナーでのアマチュア芝居公演、出演者達は、楽しげではあったが大変だったようだ。

10/3 WED ABCラジオ最終回。アシスタントやキャスター、その他いろんな人がいっぺんに変わってしまう。フリーで仕事をしている人達が多いが、みんな大変だなあと思う。

夜、ナビオのスカラ座で「ダイ・ハード2」をみる。楽しみにしていた一本。期待を裏切らない。

月一回で結構長く関わっていたラジオ、

この件がどんなことだったのか記憶がない。公務員として雇用の確保された中から、フリーの人達のことを見ていた。もっとも、マンガ家としての仕事ではフリーだったから、連載が始まったり、突然終了したりする事への不満や不安は共感できた。

サラリーマン編集者に、いいように言われて連載打ちきりになったり、原稿料を値下げされたりしているフリーランスの憤懣はわかる。

最近のニュースで警察官が、釣り情報誌に連載をして稿料を貰ったことが問題になり、退職したと聞いた。私は公務員に途中採用（欠員補充のために7月採用）されたとき、既に新聞にマンガの連載をしていた。人事課はそれを承知で採用した。そして、一度も問題にされることなく、25年過ごした。京都府の依頼仕事に漫画を描いて、原稿料まで貰ったことがある。例外だったのだろうか？

「ダイ・ハード2」は良く覚えているというより大好きな映画だ。正当な映画ファンなら、第一作が良いと言うべきなのだが、好みだからしょうがない。特別版DVDも持っていて、今もたまに見返すことがある。

10/4 THU 受理判定処遇会議。

シナリオが何かふくらみが足りないの
で、手直しのアイデアを書いている。難しい、演出家のセンスとこっちのそれとの
違いにも苦勞する。違った感性の人との
共同作業は難しい。

公演「児童相談所の日」（タイトルは違ったと思うが内容はそうだった）のシナリオを書いたのだった。シノプシスといった方が良いようなものだったかもしれない。中味の記憶が曖昧だが、福知山児相にいた小巻さんが演出した。児相研セミナーで主

に同業者に見せるモノだから、積極的に楽屋落ちと共感を狙ったモノだった。

当時はまだ、こんなに豊かに仕事と関わることが児童相談所において可能だった。状況が激変するのに、大した時間は要らないことが今になるとよく分かる。

10/5 FRI 朝一番に、児相研セミナーの案内をもって、本庁の主管課長のところに挨拶に行く。その後、三児相課長・係長会議。議題山積み。夕方、再び今度は呼ばれて府庁・児童家庭課へ。三児相課長で話を聞く。話が長引いて、出張開催している亀岡の勉強会は欠席。そうなる結果的に、「編集者講座」の遅刻出席が可能になる。講師はイラストレーター安西水丸氏。面白く話を聞いた後、有志で飲み会をやるのに初めて付き合う。12時前まで三条小橋「めなみ」でおばんざいを食べながら引き続き水丸氏の話聞く。

任意の団体が実施するセミナーを、京都府も応援してくれることになっていた。職場をあげて協力体制を組み、主催雑務への協力も取り付けてあった。(申込書が届く宛先、必要書類のコピー機使用、封入発送などの作業場提供、問い合わせ電話受信等、筋から言えば、いろいろ言われそうなことを、「一つよろしく」でお願いできていた。そして来賓として挨拶も頼んでいたと思う。そんな協議で、夕刻に再度本庁に出向いたのだったと思う。)

亀岡勉強会は川畑君と地域担当CWが行ってくれた。京都児相では、担当地域の学校教員達との定例よもやま相談会を、夜、地域に出向いて開催していた。乙訓地域も同様で、隔月交代実施していた。熱心だったなあと思える。

編集者講座の講師との飲み会がよくおこ

なわれていた。自分が酒を飲まないことや、公務員だから明日の勤務スケジュールがあって、あまり出席することはなかった。だからこの日は珍しく気が向いて同行したのだった。

この時、安西水丸ファンの人々の振る舞いをみて、ファンとはこういう人のことを言うのだと感心した。とても彼のことをよく知っていて、著作などもみんな読んで記憶している。作家にしたら嬉しいだろうと思った。私はせいぜいイラストを知っているくらいだった。氏は村上春樹の本の装丁を、沢山している。

10/6 SAT 高校生の家庭内暴力ケースの家族面接初回。午後、二代前の相談所長・吉田研二さんの退職を労うパーティがあった。午後2時から始まって、最後のカラオケ店を出たのは11時過ぎだった。9時間あまり、ウーロン茶、ジンジャール、ジュースでトイレばかり行っていた。

吉田さんは中間管理職になったばかりの私にとって、とてもありがたい所長だった。そのことに本当に気づいたのは、後任の正反対の所長が着任したときだった。この二人が余りにも違っていたことから、管理職のあり方や、どういう事が問題になるのかも学んだと思う。

ある組織の職員相談室で受けるケースに、「希望したわけでもないのに管理職になって苦しい…」と訴える人が少なくない。しかし、子どもが出来たら親をやらなければならないように、そういうことは人生にあると、なぜ覚悟が決まらないのだろうかと思う。

10/7 SUN 夜更かしが続いていたので、昼まで寝ていた。製作から発送まで思

いのほか時間がかかってしまったDAN通信の11号を仕上げた。

この時はまだ月刊ペースでミニコミ誌（D・A・N通信）を制作していた。原稿を書いて、コピーして、折ってシールを貼って、記念切手を貼って発送していた。一番長く続いた時期には300通くらい発送していた。毎半年賀状を出していたようなものだ。

今では、ブログもツイッターもfacebookも、書いたら即、送信である。手間は要らない。変われば変わるものだ。当然のことながら、メリット、デメリットはあるだろう。

10/9 TUE 夜、久しぶりに家族療法訓練の担当日だった。緊張しながら臨んだ分、非常に面白かった。

京都国際社会福祉センターの家族療法訓練はこの時、スタッフ三人で交代担当していたのだった。もう今では記憶もおぼろげだ。

10/10 WED 祝日。例によって昼まで寝ていた。その後、机の周りを少し片付けながら原稿を描いた。夕方、最近の知人のTさんから、会社の方針とじっくり来ないので転職を考えているという電話。「転職先は今の時代いくらもあるが、やりたいこととなるとナカナカだ」という。Tさんに幸運を。

そうか、この時代の感覚はこんなだったのだ。彼は放送局のディレクターで、管理職への人事異動を断っての退職だった。今なら、辞めたところで次の仕事がそう簡単には見つからないだろうし…という事になるのだろう。そして私自身がこの8年後に公務員退職の選択をすることになるなど、想像もしていない。

時の中では、あらゆるモノが変化する。何がどう変わるかなどはさっぱり分らないが、同じままであるはずはないという点だけが確かだ。この「変化」に対して、ポジティブもネガティブもという当然のことへの確信のない人が、ずっとこのまま続くような気がするという夢を見たがる。

10/11 THU 受理判定処遇会議。夜は公演のシナリオ確定作業。いろいろあったけれども、とにかくいよいよ稽古に入ることになる。出演の皆さんよろしく。

児相で働く人たちが、日程を決めて集まって、芝居の稽古をしていた。京都府内三児相合同で演劇をする。今思うと、なかなか文化的な話だ。この時期、各職場にダウンして休職中という人はなかったのではないかと思う。そして児相在職年数は、みんな長かった。公務員職では恵まれた良い仕事だと思っていた。就職して以来、退職するまでずっと児相という元気なおばさんもいた。

10/12 FRI 「いい話の新聞」というのを企画している細見さんが来訪。これはその内いろいろな展開になっていきそうな気がする。

面接を一つした後、K子が弁護士と会った結果を話しに来た。帰路、葵橋ファミリー・クリニックにマンガ原稿を届けて、入口で事務局長・園昌和と立ち話。なかなか組織運営は大変という。彼は小学校の同級生で、ボーイスカウト時代から御近所の幼なじみだ。

細見さんの画期的な新聞は創刊された。私もコマ漫画を描かせて貰っていた。経営的には苦難の数年を、必死に持ちこたえ、そしてつぶれた。その後、彼は病魔に倒れ、亡くなった。

ニュースといえば他人の不幸、これが結局「新聞」「TVニュース」の限界なのだろう。良いことが沢山あることを告知するのが、世の中を良くする一つの道筋なのだが、よからぬ事のレポートの方を世間は求めてしまう。細見さんのコンセプトは間違っていないが、事業として成立しなかった。そんな起業家の話を、つい最近もNPOのスタッフとしたばかりだ。

10/13 SAT 第二・四土曜は閉庁で休み。読売国際漫画大賞の応募作品と「こども旅」の原稿を仕上げた。夕方から労演、「出雲の阿国」太地喜和子。何だか面白くない。その後、川崎、広谷のおっさんトリオが北山通でクレープを食べた。どうだ、似合わないだろう。

この時代はまだ、週休二日ではなかった。今ではもう、思い出せないくらいだ。太地喜和子が、下田の海で事故死するのは、この後なのだなあ。

10/14 SUN ずるずると読売国際マンガ大賞応募作品を描いていた。この賞はまだ、佳作に一度入っただけだ。



優秀賞を受賞して、元旦の新聞に作品が

掲載されることになるのは、この八年後の事である。(メダルはその時のもの。誰かに見せたことはないから、本邦初公開だ)

その日まで、この後もただただ応募し続けた。止めてしまっても良いのに、そうしなかったのはなぜなのか？不思議な気がするが、どこかで止めていたら受賞はなかったのだと思う。

もしそうだったら、自分のマンガ家としての意識は、多少違ったものになっていただろう。結果の見えない未来に向かって二十年以上も、毎年応募し続けたことに、我ながら感心する。

そして、こういう日々が、自分を根気強く粘る人間であるとか、諦めなければ陽のさす時は来ると思う人間に育てた。

結果ではなく、プロセスが人間を育てるのだと実感しておくことは、人生において大切なことの一つだ。

10/15 MON 徳島県児相から依頼されて16日午前中、家族療法の研修をすることになった。午後から出て前日泊の段取りになっていた。そうしたら妻が、私もついて行こうかなあと言いだして、そういうことになった。そこで遠回りだけれども、瀬戸大橋をJRで渡ることにした。パノラマ車両900円は十分値打ちがあった。

10/16 TUE 昼過ぎまで講演をした後、市内見物をしていた妻と合流した。鳴門へ行って渦潮を見ようという。せっかくだから潮の勢いのいい時間に合わせて行こうという。小型船で海峡にかかると、思ったよりはるかに大きな渦や波が見えた。その後、高速バスで淡路島・津名港に。そして高速フェリーで神戸についた。

まれに妻が講演に同伴することがあった。そんな時はちょっと足を伸ばして観光もし

た。記憶にあるのはもう一度、宇都宮行きに同行したとき、奥日光まで足を伸ばしたことからだ。

10/17 WED 午前中、月例家族療法ビデオ・カンファレンスにケースを出す。午後、教護院(現・児童自立支援施設)との話し合い。「教育権保障」問題と「年長児処遇」問題がテーマ。主に非行のあった子供達が措置されている教護院は、現在の日本で唯一学校教育法に基づく義務教育の体制が未整備の所である。夜、編集者講座の予定が講師の発熱で中止になった。そこで見たいと思っていた映画「ゴースト・ニューヨークの幻」に行った。平日の夜なのに若者でいっぱいだった。甘口のセンチメンタルな分かりやすい作品だった。たくさんの女の子達がすすり泣きながら見ていた。こんなことに出くわすと「いいじゃないか、なかなか」なんて思う。

外部からSVを招いて、月例で家族療法のカンファレンスをしていた。そしてだんだん飽きてきたりもしていた。今考えると、贅沢な話だ。こういう状況を作り出せたのは、時代もあるし京都児相の取り組みの成果という部分もある。

京都府の三児相には全て、ワンサイドミラーの設置した家族療法室があった。この設備は要求して設置して貰ったものだが、本庁担当者の理解があって、宇治児相の新築時に三所一斉に設置されたものだった。主管課の係長が、児相業務を理解して、イロイロ尽力してくれていた。

当時の教護院問題は結局、内部の人たちの古い体質を、外から変えるのは困難だった。児童福祉施設全体に対する研修の働きかけにも拒否的なままだった。教護院は、

府県によって様々な状態のまま、児童自立支援施設という名称にかわっていった。

長い付き合いの早樫一男が、一時期、京都府の教護院校長職にあったが、私には結局、何が問題なのかすっきりとは見えないままだった。

10/18 THU 受理判定処遇会議。一時保護の女の子がいるので宿直。

全国をみわたすと、今も少数派で存在するようだが、職員が交代で一時保護中の子どもがいる日は宿直をしていた。負担だったが、メリットもあって、労働条件のことだけで一口にどうこう言えないところがあった。

宿直勤務時の子どもとの交流は、生活施設職員経験のない身には、なかなか貴重だった。食事のこと入浴のこと、それぞれの育った家族を反映した多彩さだった。

調理員さんが作ってくれたたくさんのご馳走を前に、いきなり白いご飯に醤油をかけて食べた子どもを見たのは、随分前のことだ。

そう言えばベストセラー「ホームレス中学生」の著者である芸人が、成功してから番組で、豪華な食事をしている所を放送していたが、辛くて見ていられなかった。

10/19 FRI 愛知県半田児相から(療育事業琵琶湖一周サイクリングなど)の視察に二人みえた。ビデオを見ながらいろいろ話す。夜は編集者講座。中西亮さんの世界の文字の話。非常に面白い教養講座。

全国の児相から視察者も多かった。京都見物を兼ねていた人も多いただろうが、熱心な人も多かった。自分たちの所の仕事を自慢に思っていたので、打診が有ればどんどん受け入れていた。2,3カ所からの視察が重なることもあって、遠方から来た児相職員同士の思わぬ交流になったりもした。

10/20 SAT 「いい話の新聞」の細見さんの紹介で、露路裏文化研究会(ロジケン)なるものの発足準備会に参加。会場が京都・島原の「輪違(わちがii)屋」というのに惹かれたところがある。初めて太夫なるものを見た。おまけに飛び入りでグローバル・アクション「サハラを2020年までに緑に」という運動の京都オフィス開設のため来日しているユーゴスラヴィアのエリザベス王女という人が、女性二人を伴って一同席した。とにかく何だか目まぐるしくたくさんの人と名刺交換をした。このごろ流行りの異業種交流みたいなものだ。

好奇心の塊のように動いていたし、成果を手にしたことも少くない。一方で、世の中の様々なことが、あっという間に過ぎていってしまうものだと実感した。

ユーゴスラヴィアは国自体がもうない。露地研も数年で消滅した。あの時テーマにされていた事が解消したわけではないだろう。問題はなくならないが、問題解決を唱えた方は居なくなる。これが世の常だと学んだことは、その後の自分の行動選択に少なからず影響していると思う。

10/22 MON 宿直勤務のアケで昼から出勤した。K子の事件のことで約束してあった河本弁護士の事務所に行った。時代祭のせいで道路が異常に混んでいて、自転車で行ったのに何度も道を迂回した。

戻って夫婦家族面接をして、その後、宇治児相の佐藤課長と二人で、福知山の鉄川課長の家に行った。

全国児相所長会の実施している非常に書き難い登校拒否児への取組のアンケート記入と、近畿児相長会議の議題の回答をまとめるためだ。時間がないのでやむを

得ずこんなことになった。そのあといろいろ四方山話。

おかしな仕事の仕方だと思うが、楽しんでいた。男三人で助け合いながら、三児相の課長業務をまっとうしていた。ちょっと部活のような気分の所があって、仕事がまったく苦ではなかった。ノルマという印象もなかった。得手、不得手があった三人が、お互いを尊重し合いながら仕事をしていた。

状況に恵まれていたのか、三人の人柄かは判然としないが、葛藤は少なかった。サンショお互いの情報はスムーズに共有されていた。

10/23 TUE 福知山児相で業務検討会議。療育キャンプ事業の到達点と問題点、教護院の抱えている課題に対して、児相がどう係わっていくかを中心に話した。

以前も書いたが、業務検討会議(ぎょうけん)は三所持ち周り開催で、長い期間続けた取り組みだ。児童福祉司、心理判定員、一時保護所職員、庶務担当職員、そして管理職が各所5人一組で、あらゆる児相業務について見直しをしていた。

働く者が自ら、自分たちの仕事を「科学する」という言い方をしていた。業務の細部、一つ一つを検証していた。

仕事の中味について考えることなく、労働としての不満や、人間関係のことをグズグズ言うのは、労働者としても、人間としても、弱体化している。その先に病休しかないなんて、いかがなものだろう。

10/25 THU 近畿児相職員研修会が京都市の主催で行われた。僕は留守番をしていたが、戻った人達がそろって批判的だったのに驚いた。近いから余計に、要らないところまで見えるのだから、確かにちょっと

京都市児相は悪く変わってきたなあと
思う。

政令指定都市児相と、そこを含む府県の児相が仲の悪いのは当時定番だった。今、更に中核都市に新たに児相が設置されている。そこと都道府県児相の関係はどのようなだろう。

当時、京都府の児相は京都市児相に、伝統的に小言をいうスタンスだった。そしてたしかに具体的なエピソードとして、杜撰に思うことがいっぱいあった。京都市児相は臨床の専門機関だという意識が強かったように思う。私には似合わないことだが、府の中間管理職として、京都市児相の対応のまずさに、心理職出身の所長直々に、苦言を呈したことがあったのを思い出した。

10/26 FRI 向陽保健所主催の「保健・医療・福祉ネットワーク会議」に出た。痴呆性老人・寝たきり老人の問題がほとんどで、出番はなかった。しかしいくつか勉強になる事実があった。

この頃の私や児相の意識はこんなものだった。自分たちは児童福祉が専門だと考えていた。乙訓地域の保健所では、保健、医療、福祉のネットワーク化を考えていたから、こういう会合への呼びかけがあったのだろう。しかしここから何か新しい動きが開始されていった実感はない。

10/27 SAT 昼まで寝ていて、午後、こと葉(小二の娘)のバレエ・レッスンに付き合った。一時間、小さな女子達がアヒルみたいにチョロチョロしているのを見ていた。大きな窓から琵琶湖の見渡せるビルの三階から、イラクは遙か彼方のように思えた。

この時、湾岸戦争まっただ中だったイラクも遙か彼方だったが、8歳の娘の保護者として、レッスン場の隅にいた時間も、遙か彼方になった。

この娘が今や30歳。劇団四季では中堅クラスで、厳しい舞台に奮闘中だ。

10/29 MON 心理テストカンファレンス。三児相の判定員が月一度、集まってデータのブラインド分析で研鑽を深めている。しかしまだまだ負けない(何という根性だろう)。そのあと家族面接が一つ。

読み返してみてもあらためて、仕事を始めてから、勉強するようになった気がする。専門書ばかりではないが、読書もするようになったし、研修にも幅広く出向いた。自分を取り巻く世界の構成にも関心が向いて、乱読は加速した。元気で他動なため、仲間達と次々企画を立てて実現していった。

良い時代だったというのも否定は出来ないだろうが、受験や資格取得のための詰め込まれる学習はしてこなかったのも、学びのキャパシティは十分あった。それは自分の好奇心の持ち方で、計ることが出来ると思っていた。